

2010年8月 アカデミックセミナー 要旨

設備投資研究所

講師：青山学院大学大学院会計プロフェッション研究科 小西範幸教授

演題：ナラティブ・レポーティング ―財務諸表外情報の開示の現状と課題―

日時：2010年8月23日（月）15：30～17：30

要旨

本報告では、ナラティブ・レポーティング（Narrative Reporting）の中核をなす財務諸表外情報の開示の問題を、財務諸表の本文および注記との関係に焦点を当てて、その理論的および制度的な見地から検討する。

ナラティブ・レポーティングは、ナラティブ・ビジネス・レポーティングとも呼ばれ、記述的会計情報の開示、記述的説明情報の開示、記述情報開示、定性的情報の開示、財務諸表外情報の開示、非財務情報の開示などと翻訳され、その意味は多義多様である。

本報告では、財務諸表を補足、追加、あるいは補完する情報として次のものを含むと考えている。

- ①会計情報以外の非会計（非財務）情報
- ②定量情報も含んだ記述情報や定性情報
- ③財務諸表で開示されない財務諸表外情報

こうしたナラティブ・レポーティングの重要性は、近年、広く認識されている。アメリカやカナダにおいては「MD&A」で、またイギリスやドイツをはじめとするEU諸外国においては「取締役報告書」で開示されている。わが国においても、平成16年3月期から有価証券報告書に、「事業等のリスク」や「財政状態及び経営成績の分析」（現在では「財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析」）等の項目が新設され、こうした情報の開示が制度化されてきている。

ナラティブ・レポーティングの必要性を論じる上で重要なのは、その背景にある国際財務報告基準（IFRS）の枠組みについて理解を深めることである。これまで現金基準により認識していた過去のキャッシュフロー（historical cash flow）と、発生基準により認識していた見積みキャッシュフロー（accrual of future cash flow）に加えて、その実現の可能性あるいは信頼性が問題となる予測キャッシュフロー（realizable cash flow）も含んだ「キャッシュフロー」による認識・測定・評価、すなわち企業価値の計算が行われていることを踏まえる必要がある。

すなわち、財務諸表の項目は、将来事象の予測を計上する「キャッシュフロー基準」により認識され、公正価値（fair value：資産・負債に関する主要な、または最も有利な市場において、市場参加者間で資産を販売する、または負債を移転する通常の取引における価格、すなわち、現在出口価値であり、時価と同義ではない。）により測定並びに評価されて、

その評価においては不確実性あるいはリスクが勘案されるようになっている。このように認識領域が拡大するにつれて、測定可能性が重視されてきており、公正価値測定に求める信頼性は、観測者間のコンセンサスを得ることであり、また、表現の忠実性の保証および間接的検証可能性であり、正確性（precision）ではない。これらの認識・測定・評価の結果、財務諸表と財務諸表外情報とに区別され、今日では不確実性が高いはずの財務諸表外情報の開示が積極的に行われ、企業情報の開示（財務報告）は拡大化の一途にある。

各認識基準および各測定基準によって、財務諸表と注記と財務諸表外情報へと決定するまでのプロセスは以下の通りである。

- ・現金基準により認識され、歴史的原価で測定できるものは財務諸表に計上される。
- ・現金基準では認識できないが、発生基準により認識され、歴史的原価等で測定できるものは財務諸表に計上されるが、測定できないものは注記で表示される。
- ・現金基準でも発生基準でも認識できないが、リスク基準（キャッシュフロー基準）により認識され、そして公正価値で測定できるものは財務諸表に計上され、測定できないものは注記で表示される。
- ・現金基準、発生基準、リスク基準のいずれでも認識できないものが財務諸表外情報として開示される。

以 上